



特集

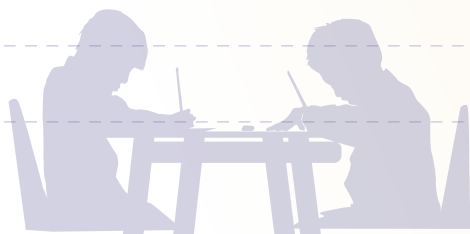
「統一合判」

中学入試レポート vol. 5

いよいよスタートした2015年入試。 これから1年間の受験 準備と学校選びのために!

いよいよ年が明けて、2015年1月を迎えた。5年生の皆さんは、もうすぐ新6年生として本格的な受験勉強に取り組んでいくことになる。そこで、気分も新たに、これから1年間の確かな学習と受験準備に取り組んでいけるよう、この2015年の入試状況をしっかり見つめ、親子でもう一度「さあ、がんばるぞ!」という気持ちを固めていただきたい。

また、お子さんたちが来春2016年の中学入試を経て、それぞれが進学した中高一貫校から大学入試に挑む2022年の前年となる2021年からは、大学入試のあり方が大きく変化する。その動きも見据えて、わが子にとっての最良の教育環境を考えていただきたいと思う。



首都圏模試センター

2015年入試で志望校に挑んでいく、先輩受験生の姿に多くを学ぼう！

もう2015年2月は目前。現6年生の受験生はみな、最後のがんばりを見せている時期だ。首都圏模試の小5「統一合判」も今回で最終回。次の機会は4月19日(日)の小6「統一合判」の第1回になる。だからこそ受験生の皆さんには、これまでの模試の結果を今後のステップとして上手く生かしていただきたい。

すでにこの1月初旬からは、茨城、埼玉などの私学の入試を皮切りに、2015年の首都圏中学入試が本格的にスタートしている。続いて1月20日からは、千葉の私学の入試がスタートし、同時に東京の私学の願書受け付けも一斉に開始される。首都圏入試の本戦舞台である2月1日も、3週間後に迫ってきた。

これからの1年間で、来春2016年の入試に挑む現5年生にとっての、まさに“勝負どころ”となる。同時に、いま現実の2015年入試に挑んでいく現6年生(先輩受験生)の親子の姿からは、来年の志望校合格のために非常に多くのことを学ぶことができる貴重な時期でもある。

どうか、これから半月の間、この2015年入試の状況をじっくりと見定めていただきたい。これまでも入試の話や風景については、塾での保護者会や学校説明会で、多くを聞き知ってきたことだろう。しかし、これから半月の間は、まさに現実の(悲喜こもごも)ドラマが、身近なところで繰り広げられる。何も実際に入試風景を見学に行かなくてもよい。入試に関わるすべてのことに耳を傾け、意識を向けることで、2015年の入試状況を肌で感じ、そこから来春2016年入試に向けて、貴重な教訓や“合格へのヒント”を得ることができるはずだ。

そのためには、入試に関するニュースや、首都圏模試センターのWebサイトでも日々更新状況が紹介される「倍率速報」(1月7日からスタート)など

にも注目し、この2015年入試をリアルに感じ取ることが大切だ。

そして入試直後には、各塾が入試情報を収集、分析して発表する「入試報告会」「入試研究会」などにも積極的に参加するとよい。

そこでは各校の入試状況(競争率や応募者数、合格最低点、入試問題傾向など)が明らかにされるので、現実の入試が「どのようなものか」をつかむうえで参考になる。まず、それを知ることが、その翌春2016年入試に向けての第1歩と考えていただきたいのだ。

現実の入試の結果には、合格もあり、また不合格もある…。

このレポートを初めて目にさせていただく1月11日には、すでに茨城や埼玉エリアでは入試が開始されている。この2015年入試では、埼玉入試スタート日の1月10日と翌11日の午前・午後に新設された入試も多く、東京や神奈川の2月1日・2日と似た午前・午後の入試ラッシュとなっている。しかしそうした状況のもとでも、この数年、志願者を増やし続けてきた栄東の勢いと求心力はさらに強まることだろう。



2014年2月1日に行われた芝中(第1回)の入試風景。東京タワーのふもとに多くの中学受験生が集った。



続いてすぐに1月20日からは、千葉エリアの入試の幕開けとなる。たとえば、幕張メッセの大フロアを会場に毎年約3,000名規模の入試を実施してきた市川中入試風景は、その様子を目にするだけでも、来年の入試に向けて気持ちが引き締まることだろう。同じ1月20日からは、東京都内の私学で願書の受け付けが一斉に開始される。

この時期、こうしたことをお子さんと話題にして「入試はこんなふうに行われるんだね」と親子で想像してみるだけで、1年後の入試がぐんとリアルに感じられるはず。そしてそれが何らかの形で、お子さんにとっても、ある種の刺激や励みになってくる。

そして2月1日には、いよいよ首都圏入試のメインステージの幕が切って落とされる。この日の朝、現6年生の受験生は各自の志望校に向かい、これまで培ってきた力を思い切り発揮すべく、それぞれの志望校の入試問題と正面から向き合うことになる。

この日、試験教室に向けて吸い込まれていくわが子の後ろ姿を見守る多くの保護者は、ただひたすらに「どうか十分に力が発揮できますように…」と祈る。そして、合格を願う以前に、自分の足で試験会場に向かっていくわが子の姿に、心配と同時に頼もしさや成長の喜びを感じつつ「今日までがんばってきて偉かったね」、「悔いの残らないようにながら頑張っておいで…」と願うという。

そして入試が終わると、やがて合格発表。この数年で、入試当日の合格発表を行う学校が非常に多くなったことによって、早くも1日の夕刻から、合格の喜びと不合格の悔しさが交錯するドラマが現実のものとなる。

合格の笑顔の影に、不合格の現実を噛み締めて帰路につく親子の姿がそこにある。

こうした入試の現実を、1年後には自らが立ち向かう舞台として真剣に観察する。そこには、果敢に入試に挑み、その結果（合格も不合格もともに）を

正面から受け止めようとする先輩受験生の親子の姿がある。その重みは、見ているものに、必ず何か大切なものを感じさせてくれることと思う。

この1年の歩みが、良い経験になるよう、悔いのない準備を重ねていこう！

入試が“選抜の場”である以上は、そこに合格と不合格という二つの結果があるのが現実だ。実際の入試では、ほとんどの受験生と保護者が、合格と不合格の両方を経験することになる。受験した学校すべてに合格するという幸運なケースは、ほんのひと握りだと考えておくべきだろう。

そこで大事なのは、そうした結果を、その都度どう受け止め、それを「良い受験体験」として生かせるかどうかということになる。

来年のそのとき、合格も不合格も合わせて、「実り多い受験体験だった」と思えるように、この1年間の歩みをしっかりと計画し、悔いのない準備をさせていただきたいのだ。

もちろん、いまはなるべく目標を高く持って、各自の第1志望校の“合格”をめざして努力していく強い気持ちが必要だ。

しかし、中学受験を通して得られる大切なものは、必ずしも第1志望校への合格だけではない。これから



2014年1月10日行われた栄東中（A日程）の入試風景。約5千人という1回の入試では過去最多の受験生を集めて話題となった。

1年かけて、幅広く受験校を探していけば、めざす第1志望校と遜色のない、あるいは別の魅力や特色を持った、価値ある併願校が必ず見つかる。そういう「第2、第3の選択」を、保護者の広い視野で選んであげることが、お子さんにしてあげられる、力強い受験のサポートのひとつとなる。

また、志望校への「合格」という結果だけではなく、中学受験にチャレンジすることや、そのために目標を持って努力していくことを通して、お子さんが強く逞しく成長していくのを実感できることと、その姿を見ながら、親がわが子にぴったりと併走してサポートしてあげられることが、中学受験の大きな意義といえるだろう。現にそれは、すでにお子さんの中学受験を経験した多くの保護者が、経験談として語っていることだ。

そうやってわが子の中学受験と、そこまでのプロセスを価値あるものとして理解し、受けとめることができれば、入試でも必ず満足できる結果が得られるはず。たとえ第1志望ではなかったとしても、親子とも納得の行く併願校に合格して進学したケースでは、ほとんどの保護者が「良い学校に進学させてあげることができてよかった」と、その受験体験を懐

かしく語ってくれる。

親子でそういう「中学受験ならではの」価値ある体験ができて、わが子が楽しく充実した中高6年間を過ごすことができれば、保護者として、これに勝る喜びはないはずだ。

中学受験は「親子の二人三脚で挑める最初で最後の受験チャンス」といわれる。親がリードする小学校受験や、本人が主体の高校受験とは違った達成感や充実感が得られるのが、中学受験ならではの魅力なのだ。

日本の教育の転換期を迎えた2016年入試は、「21世紀型の」教育観・学力観が焦点に！

そして、これからほぼ1年後に現5年生が挑む2016年の首都圏中学入試は、また大きな転換期を迎える。

昨年の春までは「2018年大学入試改革」といわれてきた大学入試制度の大きな改革は、諸事情により、当初の計画より少し遅れて2021年入試から実施される見通しが高まってきた。つまり現在の小学校6年生が大学入試に挑む年からということになる。



聖光学院では新校舎とキャンパス工事が2014年秋にすべて完成し、人工芝のグラウンドも整った。浅野でも2014年11月に図書館・体育館が竣工。栄光学園も2017年の完成をめざして新校舎建設に踏み切る計画が公表されており、神奈川の人気男子校の教育環境が大きく進化する。



日本の教育が大きな転機を迎えた現在、2016年には新たな“中学受験ブーム”が到来！

～いったんは規模縮小に向かった中学入試が、2016年入試では新たな市場の拡大へ！～

私学と公立の学校が激しく変化するなかで、より良い進学先を探し出そう！

この10年間で、今春2015年以降の新たな私立中高一貫校の誕生や改革の動きは、あとのページのコラムに紹介しているように、この間、大学付属・系列校では、大きな改革の動きが相次ぎ、これと対抗するかのように、系列・併設の大学を持たない中高一貫の進学校でも、自校の教育プログラムや学びのスタイルを変化・進化させる教育改革・入試改革を推し進めている。そし



埼玉栄では3400名収容可能な新校舎を建設。2016年6月の完成をめざす。

て来春以降も、また新たな私学や公立中高一貫校が誕生する。そうした動きの相乗効果により、来春2016年の首都圏中学入試の情勢にもかなりの変化が生まれることは必至だろう。

本文で触れた「2021年大学入試改革」は、現在の小学校6年生以降のお子さんが直面する問題だけに、多くの私立中高一貫校が、この機に自らの教育をさらに充実・発展させていこうと自助努力をすることで、再び受験生と保護者の注目を集めることが予想される。そうした私学の動きが、再び中学受験を活性化する期待も感じられるようになってきた。

この2015年の入試結果は、3月には詳しい総括でお伝えできるが、現段階でいえることは、現5年生のお子さんが挑む来春2016年の中学入試は、また新たな熱気や受験規模のもとで、再び受験率が高まるだろうということだ。

このレポートで述べたような日本の教育の大きな変化をはじめ、「21世紀型教育」をめざす私学の人気増加や、多様な選択肢の広がり、潜在的な受験者層を新たに中学受験に注目させることにつながり、わが子を2016年入試にチャレンジさせようとする家庭は、再び増加に向かう可能性も高い。

そういう意味で、お子さん方が挑戦する来春2016年の中学入試では、なおさら「価値ある合格」のチャンスが広がってくる。そういう状況のなかで、これから1年、高い目標と大きな希望を持って、それに向けて力強く努力を重ねていってほしいと思う。

かつて1979年から国公立大学入試に「共通一次試験」が導入され、その後1990年からの「大学入試センター試験」へと引き継がれてきた大学入試制度が廃止され、2021年からこの「学力評価のための新たなテスト（仮称）」が導入・実施されることによって、従来の大学入試で問われてきた学力観が大きく変わることになる。

その入試制度について詳しく触れるには誌面が足りないが、これまで「到達度テスト」「達成度テスト」（あるいは基礎テスト・応用テスト）などと呼ばれて報道されてきた、①「高等学校基礎学力テスト（仮称）」と②「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」が新たに導入されることになる。

前者の「高等学校基礎学力テスト（仮称）」は従来のセンター試験的な性格のテストで、高等学校教育における学習の達成度の把握と、自らの学力を客観的に提示するためのもの。高校2・3年での受験など

在学中に複数回の受験が可能で、CBT方式（※1）での実施を前提に開発。英語については民間の資格・検定試験も活用するとされている。

後者の②「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」は、従来の国公立大学の2次試験的な性格のテストで、これからの大学教育を受けるために必要な能力について把握するためのもの。年に複数回実施、CBT方式での実施を前提に開発される点は前者と共通だが、「教科型」に加えて教科・科目の枠を超えた思考力・判断力・表現力を評価するため、「合教科・科目型（※2）」「総合型」の問題を組み合わせて出題される。「知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し成果等を実現するための力を評価する、PISA型（※3）の問題を想定」とされている。

こうした新たな大学入試制度が導入される目的は、この先の世界、社会で生きていくために求められる課題発見・問題解決の力を育てるためであり、そ

※1「CBT方式」＝「Computer Based Testing」。Webに表示された試験問題に対して、コンピュータやタブレットを利用して解答する試験方式。

※2「合教科・科目型」＝「実社会や実生活での課題を解決するためには、個々の教科・科目の知識・技能の範囲にとどまらず、複数の教科・科目の知識・技能等を教科横断的・総合的に組み合わせることが必要」という考え方で行われる教科横断的な問題。

※3「PISA型」＝PISA調査(Programme for International Student Assessment)とは、OECD（経済協力開発機構）によって開始された「生徒の学習到達度調査」と呼ばれる、日本では高校1年生を対象に行われる学力調査テスト。国際的な学力評価として日本でも「新しい学力」の方向として近年注目されてきた。

5年生の学習を乗り切ったことを自信に、6年生の学習リズムを上手くつくっていこう！

～テストでつまづいたときには、5年生の教材を振り返って確認しよう！～

受験勉強のひとつのヤマ場は5年生。 その時期を乗り越えたことに自信を持とう！

いよいよ1月に入り、2015年の首都圏中学入試が開始された。現5年生のお子さん方が入試を迎える来春2016年入試までは1年と少し。それゆえ、ほとんどの進学塾では、この2月からの1年間を新6年生の新年度と位置づけていることと思う。

そして新6年生になると、いよいよ来春の入試本番に向けて、本格的な学習に入っていくことになる。これまで上手くリズムをつくってこられたおさんは、そのまま気を抜かずにステップアップを図ればよい。逆にこれまでいまだひとつ波に乗り切れなかった場合でも、この期を節目に、心機一転、いいリズムをつくっていけるよう工夫していただきたい。

この先の学習を決して怖がることはないし、焦る必要もない。進学塾のカリキュラムは、6年生の夏休み前までにひと通りの範囲を終えるのが一般的で、夏前の一時期と、その後の夏休みが最大の“ヤマ場”だといわれる。しかし、実はそれ以前に新6年生の皆さんは、すでに受験勉強の大きな“ヤマ場”である5年生の時期を立派に乗り切ってきたのである。

3年生の後半や、4年生のはじめから受験勉強に取り組んできたお子さんでも、5年生のはじめのころは、急速にいろいろなことを吸収していくのが、なかなか大変だったのではないだろうか。ましてや5年生から受験勉強をはじめたようなケースでは、何とカリズムに乗れるようになるまで、かなり苦労をしたことと思う。

この「統一合判」は、そうした5年生の皆さんの手応えや課題を確かめ、もう一歩がんばるための動機づけとしていただくためのテストでもあったわけだが、それも今回で最終回だ。

つまり、ここまで努力を重ねてきたお子さん方は、たとえ個々にはさまざまな課題が残されているとしても、「これまでよくがんばってきた」という自信を持てていい。そしてその自信とともに、昨年7月から5回の「統一合判」で確かめることのできた課題を胸に刻んで、このあとのステップを堂々と踏み出してほしいのだ。

5年生で学んだことをときに振り返り、 6年生での学力アップのステップに！

そして、これからの1年間の本格的な受験勉強をうまく消化・吸収していくうえでのコツは、ところどころで5年生のときに学んだことを振り返り、それを確実なものにして、6年生の学習での課題に生かしていくことだ。

よく「困ったときには5年のときにやったことを振り返れ」といわれる。しかし、順調に学習を進められているときにも「5年生のときの学習を振り返る」ことで効果があることも多いということを知っておきたい。

どの塾でも、あるいは市販教材でも、中学受験のためのカリキュラムは、各教科とも多かれ少なかれ、学年をまたがった「スパイラル（螺旋型）構造」になっている。

これまでにお子さん方が学んできたことは、今後、形や切り口を変えて、入試までに2度～3度と目にすることがあるはず。そのときどきに、自分の消化の度合いに応じて、5年生までに学んだことを振り返り、その知識を確実なものにしつつ、応用力・思考力を伸ばしていくことが、この6年生の学習での大切なポイントなのだ。



2014年12月7日に行われた小6「統一合判」模試の風景。5年生にはこれから毎回の模試で課題を見つけて、来春の入試に向かう力を育てていってほしい。

のベースにある理念は、従来の高校教育や大学入試（＝日本の教育）で重視された知識修得型の学力観、教育観を大きく変えてしまうものでもある。「日本語IBプログラム」やアクティブ・ラーニングの導入推進の背景にも、こうした考え方がある。

そうした変化のもとで、たとえば「21世紀型教育」「世界標準の教育」ともいわれる学びのスタイル（IBプログラム、双方向型・対話型、PBL・PIL、ICT授業の導入など）を中高6年間一貫教育のプログラムに取り入れる方向性を打ち出した（海城、大妻中野、三

田国際学園や開智日本橋学園、聖学院、かえつ有明、文化学園大学杉並などをはじめとした）多くの私学が、この2015年入試でも注目を集めている。

そうした教育をめぐる状況の大きな変化のもとで、来春2016年入試で、わが子にとって良い学校を選び出せるように、ぜひ保護者は情報収集のアンテナを高くしていただきたい。そして同時に、来春2016年入試での、わが子の“合格”への突破口を見出せるよう、いい形で新6年生としての受験準備の歩みをスタートさせていきたいと願っている。



動く。変わる。増加する公立中高一貫校と、「21世紀型教育」を標榜する 多彩な私立中高一貫校の動きが中学入試地図を活性化。

～ 2016年の首都圏中学入試も、多様な教育を行う私学の変化・進化が人気を左右する！～

●公立中高一貫校の増加を受け 私学VS公立の人気動向はどう変わる？

ここで、現小学校5年生のお子さん方が挑む2016年入試の状況を変化させる大きな変動要因について確認しておきたい。

すでに2005年から2014年にかけて、東京都内には計11校、千葉には2校、埼玉には2校、神奈川には4校の公立中高一貫校が新設された。さらに2016年には千葉に県立東葛飾高校を母体とする中学校が開校し、翌2017年には神奈川に横浜市立サイエンスフロンティア高校に附属中学校が開校する予定だ。

こうした影響で多くの潜在的受験生層が掘り起こされ、私立中高一貫校を含めた入試地図が変化することになるだろう。

●東洋大学京北、三田国際学園、開智日本橋学園が共学化。「21世紀型教育」を標榜する私学が人気増加へ。

今春2015年から、東洋大学京北（現・京北。男子校）は、白山の校地に新キャンパスが完成するタイミングに合わせて来春より校地を移転し、男子校から共学校へ。「半付属・半進学校」のメリットを存分に生かした教育体制で、新たな歴史をスタートさせる。

三田国際学園（現・戸板。女子校）は来春から共学化して校名も変更。リベラルアーツ教育を実践して思考型の学びを追及する本科と、一条校でありながらインターナショナルクラスを併設して、アクティブラーニングをすべての授業で取り入れて、独自のグローバル教育を実現することを謳っている。インターナショナルクラスでは、ネイティブスピーカーによるイメージ教育を行う。

同じく開智日本橋学園（現・日本橋女学館。女子校）も、来春から共学化して校名を変更。グローバルリーディングクラス（インターナショナルコース）と、リーディングクラス、アドバンスドクラスを併設し、21世紀型学力（探究力・創造力・発信力）を育成するためにアクティブラーニングを推進、イメージ教育も導入し、グローバルリーディングクラスでは、国際バカロレアのMYP（中等教育プログラム）とDP（大学進学に向けたディプロマプログラム）を導入する。

また、工学院大学附属中（共学校）は来春から日本初のハイブリッド・インタークラスの開設をはじめ、ダイナミックな改革を公表。文化学園大学杉並では、やはり来春から高校にダブルデュプロマコースを開設する。

このほかにも、「21世紀型教育」といわれる新しい学びのプログラムの導入を標榜する海城、立教女学院、大妻中野、山脇学園などの人気校をはじめ、聖学院、かえつ有明、桜丘、順天、聖徳学園、土浦日本大学中等教育学校、共立女子、佼成学園女子、東京女子学園、富士見丘、八雲学園など「21世紀型教育を創る会」会員校の人気も大いに注目されている。

●東京都市大学付属、東京都市大学等々力、桐蔭学園などが一般入試に英語を導入。2016年入試でも英語入試が増加へ！

今春2015年入試から、東京都市大学付属は2月2日に「グローバル入試」を新設。英語・算数・作文での入試を行う。東京都市大学等々力は2月2日午後の第3回入試で「英語選択」を導入。国・算・社・理の4科目か国・算・英の3科目を選択する。桐蔭学園は2月2日に午後入試を新設。男子部・女子部（普通コース）では国・算・英から2科目を選択、中等教育学校・女子部（理数コース）では国・英が算・英のどちらかを選択する形で「英語選択」入試を導入。英語経験者への門戸を広げる。

現在の小学校5年生が挑む来春2016年入試でも、すでに山脇学園が英語入試の導入を公表している。このほかにも、中学入試に英語を導入する動きは今後も加速し、中学入試全体に与える影響も少なくないだろう。

●横浜英和女学院が青山学院大学と提携

横浜英和女学院（横浜市。女子校）は、現在の小学校5年生が入学する2016年4月から青山学院大学の系属校となり、校名を「青山学院横浜英和中等高等学校（仮称）」と変更。この提携を期に、2018年度の中学1年生（現在の小学校3年生）の入学時から共学化に踏み切る。

気になる「青山学院大学への推薦進学」は、2016年以降の入学者については、一定の条件を満たせば希望者全員が青山学院大学に推薦で進学でき、それ以外の大学への受験～進学の道も開けている形になる。来春2016年入試に挑む小学校5年生の人気も、今後さらに高まることが予想される。

公立校が変わり、私立大学付属校が変わり、私立の進学校が変わる。来るべき2016年入試でも受け継がれる変化とその将来性に、いまこそ注目しておく必要があるだろう。



私学のなかでも「21世紀型教育」の先進校として、春入試の注目校となった三田国際学園。入試後の2月22日（日）には、この三田国際学園を含む「21世紀型教育を創る会」によるセミナー「進撃の21世紀型教育！なぜ21世紀型教育校が求められるのか」が開催される。

2005～2017年の公立中高一貫校の新設と私立中高一貫校の変化〈抜粋〉

振り返れば、2005年から2014年にかけての10年間は、「公立中高一貫校新設ラッシュ」の時期であったと同時に、私学にも数々の動きが起きている。この先2017年までの動きを紹介したい。

■2005年（現・大学4年生の中学受験時）

- ・都立白鷗高等学校附属中学校が開校
- ・東京農業大学第一（共学校）が中学を開校
- ・淑徳与野（女子校）が中学を開校
- ・大宮開成（共学校）が中学を開校
- ・浦和実業学園（共学校）が中学を開校

■2006年（現・大学3年生の中学受験時）

- ・都立小石川中等教育学校が開校
- ・都立両国高等学校附属中学校が開校
- ・都立桜修館中等教育学校が開校
- ・千代田区立九段中等教育学校が開校
- ・本庄東高等学校（共学校）が附属中学を新設
- ・白梅学園清修（女子校）が中学を新設
- ・かえつ有明（嘉悦女子）が校地移転、校名変更して共学化

■2007年（現・大学2年生の中学受験時）

- ・さいたま市立浦和高等学校附属中学校が開校
- ・千葉県立稲毛高等学校附属中学校が開校
- ・法政大学第一（男子校）が共学化し、法政大学中学校と校名変更。三鷹市牟礼に校地移転
- ・宝仙学園（女子校）が共学部「理数インター」を併設
- ・順心女子学園（女子校）が広尾学園と校名変更し共学部を併設

- ・東京学芸大学附属大泉が国際中等教育学校に
- ・横浜富士見丘が校地移転、横浜富士見丘学園中等教育学校に
- ・東海大学付属高輪台が中学を新設

■2008年（現・大学1年生の中学受験時）

- ・都立立川国際中等教育学校が開校
- ・都立武蔵高等学校附属中学校が開校
- ・千葉県立千葉中学校が開校
- ・明治大学付属明治（男子校）が共学化。西調布へ校地移転

■2009年（現・高校3年生の中学受験時）

- ・神奈川県立相模原中等教育学校が開校
- ・神奈川県立平塚中等教育学校が開校
- ・日本大学藤沢（共学校）が中学を開校
- ・東京農業大学第三（共学校）が中学を開校
- ・目白学園（女子校）が共学化し、目白研心と校名変更

■2010年（現・高校2年生の中学受験時）

- ・都立富士高等学校附属中学校が開校
- ・都立大泉高等学校附属中学校が開校
- ・都立南多摩中等教育学校が開校
- ・都立三鷹中等教育学校が開校
- ・東京都市大学等々力（女子校）が共学部併設
- ・早稲田高等学院（男子校）が中学を開校
- ・中央大学附属高校（共学校）が中学を開校
- ・成立学園（共学校）が中学を開校
- ・昌平（共学校）が中学を開校
- ・都文館（夢学園）が共学化

■2011年（現・高校1年生の中学受験時）

- ・横浜山手女子が中央大学の附属校化。中央大学横浜山手学園に校名変更
- ・横浜国際女学院翠陵が共学化し、校名を横浜翠陵に
- ・千葉明德（共学校）、二松学舎沼南（共学校。現校名は二松学舎大柏）、開智未来（共学校）が中学を開校



2016年春から共学化する法政大学第二中高では、2016年末の全面完成に向けて新校舎建築工事が順次進められている（写真は完成した時計塔本館の中庭）

■2012年（現・中学3年生の中学受験時）

- ・中央大学横浜山手（横浜山手女子）が共学化
- ・横浜市立南高等学校附属中学校が開校
- ・八王子学園八王子（共学校）、西武台新座（共学校）が中学を開校

■2013年（現・中学2年生の中学受験時）

- ・中央大学横浜山手が横浜市営地下鉄「センター北駅」近くに校地移転。校名を中央大学附属横浜に変更
- ・埼玉県内に武南（共学校）、東京成徳大学深谷（共学校）、狭山ヶ丘（共学校）、国際学院（共学校）の4校が中学を開校。
- ・茨城県立古河中等教育学校が開校

■2014年（現・中学1年生の中学受験時）

- ・川崎市立川崎高等学校附属中学校が開校
- ・安田学園（男子校）、新渡戸文化（女子校）が共学化

■2015年（現・小学6年生の中学受験時）

- ・京北（男子校）が白山のキャンパスに校地移転し共学化。校名を東洋大学京北に
- ・東洋大学牛久が中学を開校
- ・戸板（女子校）が共学化し、校名を三田国際学園に変更
- ・日本橋女学館（女子校）が共学化し、校名を開智日本橋学園に変更
- ・工学院大学附属がハイブリッドインタークラスを開設
- ・文化学園大学杉並が高校にダブルデュプロマコースを開設

■2016年（現・小学5年生の中学受験時）

- ・千葉県立東葛飾高等学校附属中学校が開校予定
- ・法政大学第二（男子校）が共学化予定
- ・本庄第一（共学校）が中学を開校予定
- ・横浜英和女学院（女子校）が青山学院大学の系属校となり校名を青山学院横浜英和（仮称）と変更（→2018年に共学化予定）。

■2017年（現・小学4年生の中学受験時）

- ・横浜市立サイエンスフロンティア高等学校附属中学校が開校予定

こうした変化のなかで、公立学校の教育の枠組みがどう変わり、私学の教育がどう進化（深化）していくのかを、しっかりと見つめたうえで、お子さんの進路を選びとってほしいと思う。